

多感動し、月分が金とあり、^{平野}故一筆の因志
 致すも大己修養すべしと定むたりに感激し
 けり。氏は逐に孫存存の多事を請うたると
 此れども果しては、氏は無面目に播磨を
 義に帰りたりの不中の正に疑向とす。水
 或人あうは、此孫存存の命、今や、^{平野}可
 山外に哀愍し到底存と維持して行へ能は
 るや。外、最也、古孫存存より、^{平野}幸事に討た
 報酬(月分と十月)をも出さし、ことにてありたるに
 乙、氏は生括に殺し、^{平野}の母氏に播磨方を元
 いたも、このころとあり。乙、このころ、^{平野}事
 り不明なるは、^{平野}氏か、^{平野}氏に言明たるに、^{平野}

キリ、に教ゆん其の針路と播磨や。或は、^{平野}村
 の假面と被し、^{平野}や、^{平野}の氏の言動に
 徴して、^{平野}と得べし。

(附記)

この事は、^{平野}聖孝の例に於てもあり、且つ分
 明なるときは、^{平野}氏の忍路存に於て、^{平野}場
 也、^{平野}の信下、故、^{平野}豊足、^{平野}の思
 とあり、^{平野}に於て、^{平野}